

物資を運ぶ交通路として利用されていた荒川

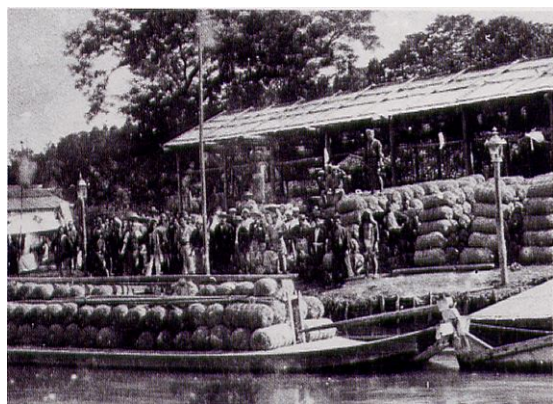
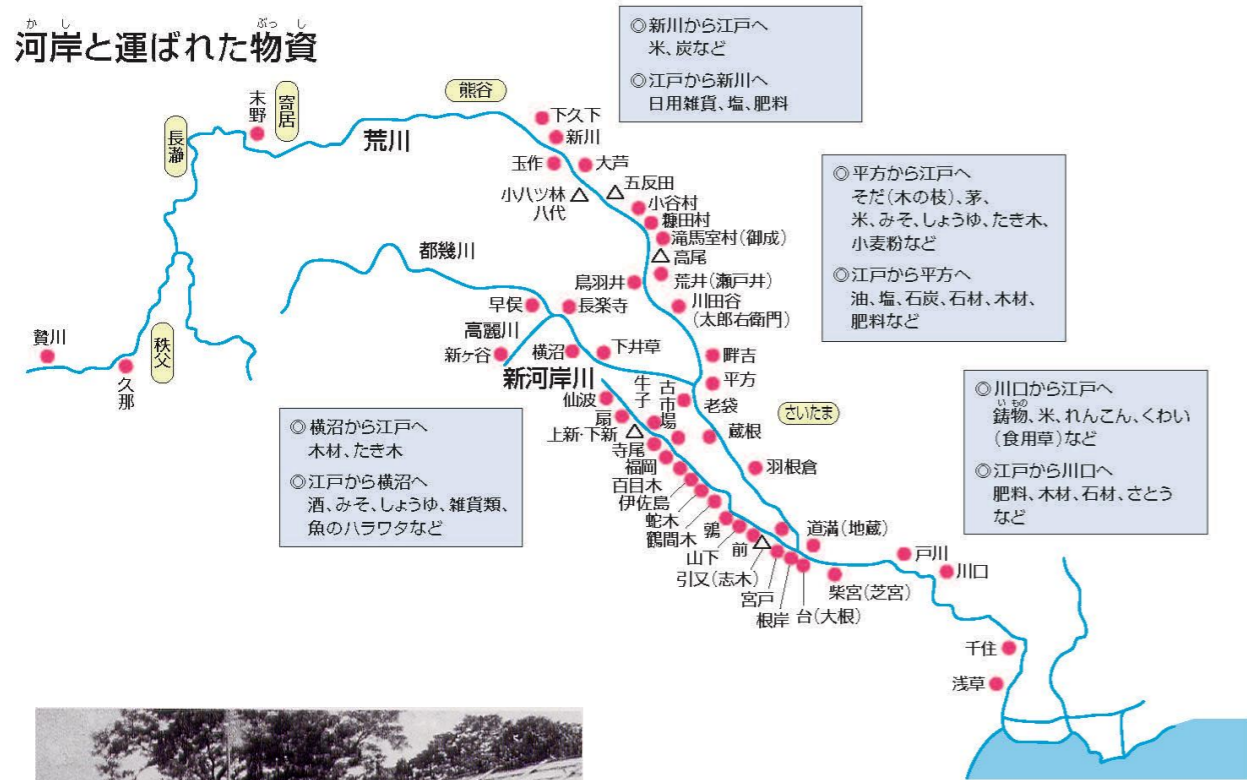
さかんに物資が行きかった荒川

鉄道や自動車のなかった江戸時代、大量に物資を運んだのは船です。川には、たくさんの川船が行きかい、物資の積みおろしの場所である河岸が、発達しました。船を使っての物資輸送は舟運と呼ばれましたが、荒川でも、水量が豊富で、流れがゆるやかだった久下（熊谷市）から下流にある河岸と江

戸のあいだで、舟運がさかんに行われました。

舟運により、物資の取り引きがさかんになるにつれて、各地の特産物が注目されるようになり、秩父の絹織物、狭山の茶などが特産物としてさかんに生産されるようになりました。

河岸と運ばれた物資



荷物の積みこみでにぎわう河岸(志木市) 画像提供: 井下田潤氏

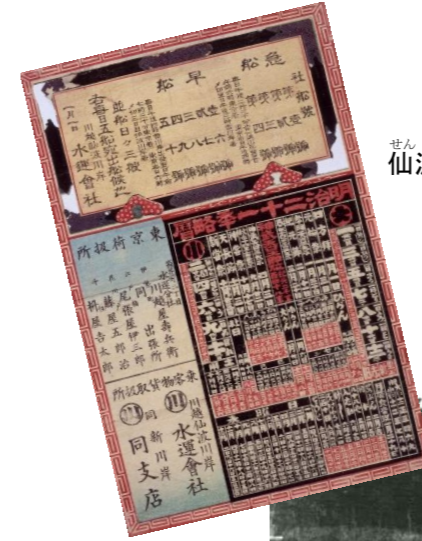
△印は元禄3年(1690)に年貢米回送用運賃が決められた河岸
●印は元禄3年以後に成立したと推定される河岸
(「荒川総合調査報告書」より)

舟運のようす

舟運で活やくしたのは、船底が平らで瀬の浅い川でも通れた高瀬舟です。高瀬舟は、ほを張ると風の力で、川のぼることができました。



新川早船の絵馬・船の安全を願って琴平神社に奉納されました(行田市) 画像提供: 琴平神社



仙波河岸の公告・運航予定表です(川越市) 画像提供: 斎藤貞夫氏



大正時代のはじめ、新河岸川を行く高瀬舟(志木市) 画像提供: 井下田潤氏

川の豆知識

イカダに組んで流した木材

秩父山地や入間地方西部にはえていたスギやマツは、それぞれ秩父材、西川材と呼ばれ、江戸の町づくりで大量に使われました。このとき、木材はイカダに組まれ、川の流れで運ばれました。秩父材は荒川を、西川材は入間川・高麗川を通過して、江戸の深川まで送られました。



イカダ流し(飯能市) 画像提供: 飯能市郷土館